

[シンポジウム]

家族観の多様化と看護職の役割 司会のことば

東海大学

鈴木和子

北里大学

森 秀子

第4回日本家族看護学会では、「家族観の多様化と看護職の役割」というテーマでシンポジウムを開催した。前日の会長講演でも家族観、介護観の世代間の差異について、看護学生とその母親の家族観、介護観の微妙な差異が調査結果から浮き彫りにされた。とくに家族看護を試みる看護職にとって、対象のもつ家族観(家族とは何かという考え方)は、援助に関わる主要な背景要因であり、また、家族看護学を考えるときに避けては通れない主題である。

そこで、今回は、多様な専門分野からの専門家にそれぞれの領域で問題とされている家族観(主として家族がもつ特有の問題にまつわる家族観)が提示され、議論された。樽川典子氏は、家族社会学の立場から、比較的若い夫をがんで失った妻と親族との葛藤、告知についての医療者側の足並みのみだれや妻への過剰な期待が妻を苦しめていることを妻側の証言という形で話していただいた。長水美野子氏からは、精神科領域では、様々な研究から家族の力による治療への協力が求められてきたという歴史的背景があり、今こそ心を痛めている家族へ目を向け、地域の力も借りて援助することの必要性が語られた。頭山悦子氏は、慢性関節リウマチ患者の家族が危機を乗り

越えることによって絆を深めていった事例の紹介があった。無笹宏子氏は、訪問看護ステーションの調査から、現代の介護家族のもつ家族観の構造的、質的変化が示された。最後に村田恵子氏からは、病児のケアをめぐる家族観とリソースということで、神戸の震災後の家族が互いにリソースとして助け合った事実とバーンアウトとの関連から、家族をアセスメントし、家族の力を高めるエンパワーメントの重要性が構造的に示された。

これらの貴重な発言の後、会場からいくつかの重要な質問や問いかけがなされた。とくに、家族側の家族観だけではなく、現代の家族の実態や、告知などの新たな医療の現実に合わせて看護職側の家族観は変わっているのか、柔軟な対応ができているのかが問われていることが議論された。今回は、各シンポジストから家族の抱える大変重い現実を認識させていただいたにもかかわらず、それに対する看護職の対応まで十分に議論が深まらなかったことは司会の不手際であるが、会場の参加者のそれぞれが職場での新たな取り組みに、このシンポジウムの成果を活かして行かれることを期待したい。